

幻想の類型学

篠田浩一



幻想の類型学

篠田浩一郎

筑摩書房

著者略歴

篠田浩一郎（しのだ・こういちろう）

1928年、東京に生まれる。東京大学文学部フランス文学科卒業。現在、東京外国語大学教授。文芸評論家。

著書：『形象と文明』（白水社）、『構造と言語』（現代評論社）、『中世への旅』（朝日新聞社）、『批評の記号学』（未来社）、『閉ざされた時空—ナチ強制収容所の文学』（白水社）、『竹取と浮雲』（集英社）、『空間のコスモロジー』（岩波書店）、『小説はいかに書かれたか』（岩波書店）、『都市の記号論』（青土社）、『再びセースは流れる—歴史の中のフランス作家群像』（TBSブリタニカ）、『物語と小説のことば』（国文社）、『仮面・神話・物語—ふたたび中世への旅』（朝日新聞社）。

幻想の類型学

1984年9月15日 初版第1刷発行

著 者 篠田浩一郎

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2—8

振替東京6—4123 Tel. 291-7651（営業）294-6711（編集）

郵便番号 101—91

印刷・厚徳社 製本・鈴木製本

0095—82179—4604

©KOICHIRO SHINODA, 1984

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

幻想の類型学

目次

序

第一章	転生と因果律の発見 『日本霊異記』	11
第二章	物怪Ⅱ生霊・死霊の出現 『源氏物語』	41
第三章	他界観の変貌 『今昔物語』	77
第四章	転換期の「ふるさと」幻想 『方丈記』	113
第五章	夢幻と滑稽 能・狂言	127
第六章	幻想小説の誕生 『雨月物語』	165
第七章	幻想の劇空間 鶴屋南北	197
第八章	幸田露伴と新時代の幻想	231
第九章	近代「劇」『役行者』	253
第十章	現代小説と『高野聖』	275

第一章～第七章 「国語通信」 82年1月～83年3月号初出
第八章～第十章 「使者」 81年夏・秋・冬号初出

序

仏教渡来以前の日本人は死後の世界についてどのように考えていたであろうか。

この設問をまえにしてただちに思い浮かぶ回答は、死後には人間は「黄泉の国」に行くという考え方である。『古事記』の有名なイザナキ、イザナミの説話が端的にそれを示しているが、この国は地下にあり、死者は原理的にそこへいかに腐敗していき、ふたたび地上の世界に戻ることはできない。私は先年、出雲の宍道湖のほとりの神社めぐりをしたおり、『出雲国風土記』に見える「猪目黄泉の穴」にもぐりこみ、背をかがめて行けるところまで行ってみたことがある。この洞穴は日本海の波打ちぎわに口をあけ、青紫色の岩に自然にうがたれた幅二、三メートル、奥行十数メートルほどの横穴であった。そのあと、出雲市役所に所属する保管所で、この洞穴から発掘された遺物類を参観したが、そのなかには古代人の人骨も交り、とりわけ若い女性のものとされるほぼ完全な全身の白骨も見る事ができた。

それはなまなましいほどに真白く、腐敗の跡もとどめていないため、死者はいったん水葬か風葬か、

あるいは殯^{もがり}のち洗骨され、洞穴内に埋葬されたものではないかと思われた。とすれば、この死者は『古事記』の説話より後代のものであるかもしれないが、いずれにしても古代人は人間は死後に地下の国に行き、魂^{たま}はそこに住むと考えていたのである。そのことはたとえば吉見の百穴が丘陵の上であり、そこから死者たちの属した村落が見おろせる位置にうがたれていることによっても明らかである。死者たちは祖霊として生者の共同体を高めから見守っていると考えられたのであった。

しかし仏教渡来前の日本人には、死後の世界についてのもうひとつの考え方があった。それはいわゆる「常世^{とこよ}の国」であって、これは「黄泉^{よみ}の国」が地下にあるのとは異り、海上はるか彼方の国である。同じく『古事記』によれば、オオクニヌシの兄弟となり、国造りを援けおえたスクナビコナの神は海の彼方の「常世の国に渡りましき」。この国は祖霊の住む国であって、そこから年に一度か数度か祖霊がやってきて幸いをもたらしてくれる。逆に死者はこの国に迎え入れられるのである。

この他界観は琉球弧が描く南島で発生して島づたいに北上したものでらしく、「黄泉^{よみ}の国」の思想が本土で生まれたと考えられるのと対照的である。那覇市の西北のはずれに琉球八社の第一位という波上宮があつて、海をはるかに見渡す断崖の上に立っているが、揭示によれば、起源は不明だが祖先の人びとが海の彼方に神の住む国を拝した御願所であったと記されている。琉球の言葉でその国をニライカナイと呼ぶ。また神とはしばしば祖霊のことである。

ところで「黄泉^{よみ}の国」と「常世の国」とは、地下と海上との差異があるとはいえ、いずれも生者の住むこの地上の世界の延長線上にある点で共通している。言い換えれば、生者の国と死者の国とは根

本的に断絶してないのである。この点が、日本古代の人間の想像した死後の世界の特徴であったが、極端に言えば、死によって人間は生者の世界から絶対的な意味で切り離されることはないと考えられていたのであった。死は生の過程の延長であり、死者はまた死者の生を営みつづけると想像されていたのである。

日本に仏教が公伝されたのは六世紀（五三八）とされるが、はじめは異国の物珍しい思想として好奇心の対象とされた。しかし百済・新羅・高句麗の仏僧の渡来をまつてしだいに理解が深化するとともに、この宗教が内包する人間の死後についての考え方は、伝統的な死は生の延長とする生死観に劇的な衝撃をもって迫ったはずである。とりわけ仏教文化が皇族・貴族の枠組からでて、民間の信仰となったとき、新しい宗教は民衆の生活に何をもたらしたであろうか。

本書は民間仏教の実態を伝えている最初の仏教書である『日本霊異記』を出発点として記述され、時代を追って近代のはじめ明治時代にまで到達する。その場合探究の中心となるのは、最初の書物の標題にもある「霊異」、すなわち仏教のもたらしたあらたな生死観によって、日本人が生と死とをめぐってそれまでは考えられなかったどのような幻想を触発されたかを跡づけることである。〈幻想〉の名によって私が指し示そうとするのは、人間の生死にかかわっての超現実的な想像力と、その想像力の結実である。まことにこの意味で仏教によって喚起された〈幻想〉なしには、日本文学史を彩るはずかずの傑作は実現不可能であったと、私は考える。

私は古くから加藤周一氏の著作に親しみすくなからぬ影響を受けてきた者のひとりだが、氏の『日

本文学史序説』上・下（筑摩書房、一九七五、一九八〇）には多くの敬意をもったものの、一点疑念が残った。それは、氏が『日本靈異記』についての見解を示した箇処にも端的に現われているように、日本人の文学的発想はきわめて現実的・具体的であるという規定であって、日本人は眼前の現実を越えることがないというこの根本的考え方はこの著作を一貫してつらぬいているのである。私のこの書物はそうした加藤氏の見解へのひとつの反指定になるはずである。

つぎに本書の標題にある〈類型学〉について解説するなら、〈類型学〉は仏語《typologie》（英語の *typology*）の訳語である。ロベール仏語辞典によれば、類型学とは「複雑な現実の分析と、分類作業を容易ならしめる、典型の練りあげの学」と定義されている。私は本書で、厳密な学というにはほど遠いが、すくなくとも〈幻想〉という複雑な現実、むしろ現象を分析し、分類して、時代を越えて現われるそのタイプを「類型的」と呼んで、文学的テキストの読解を行っている。〈幻想〉のタイプの類型性についてはことさらに言及せず、読者の明察にゆだねた場合も多い。一々の指摘は読者にとって余計であり、読書の楽しみを妨げることを恐れたからであつた。

記号学の用語をもつてすれば、時間の軸にそつて配列されたテキストを連辞^{サンダグム}とし、それらのテキストに現われる〈幻想〉現象を同系要素群からなる範^{パツティズム}列として捉え、現象相互間の類似と差異とを読解していくことになる。基本的には〈幻想〉をありのままの現象として捉えるという意味で現象学的発想に依り、こうして捉えられた現象をそのまま読解するという点で記号学（論）的発想に依り、私のねらいはこうして現象学と記号学とを結合することにある。こうした作業仮説は国際的な

記号学会誌「セミオティカ」などにも最近顕著に現われている傾向であり、ややゆきづまりの観を呈し始めた記号学（論）に新しい分野を切り開くための試みのひとつなのである。

この作業仮説については「文学研究と記号論」（言語生活、一九八三、七月号）にも略述したが、論より証拠とばかり書いたのが本書である。もともと私は、本書が記号学（論）の専門家とか、とくに記号学に興味をもつ読者に読まれることを想定せず、ごく一般の読者を想定して書いたから、右の仮説理論はできるだけ表面に表われないように努めた。さらに必要なかぎりで各テキストの歴史的背景を補足し、また読解の結果についての私の感想も略記したので、一般読者にとって興味をもって読んでいただける本になっていれば幸いである。

なお引用文の出典は、第一章から第六章までが『日本古典文学全集』（小学館、一九七〇—一九七六）の各巻により、他の版を使用した箇所ではそのことを記した。以下、第七章は『鶴屋南北全集』第五、六、十一巻（三書房、一九七一—一九七二）、第八章は『現代日本文学大系』4（筑摩書房、一九七二）、第九章は『逍遙選集』第一巻（第一書房、一九七七）、第十章は『現代日本文学大系』5（筑摩書房、一九七二）に依る。

一九八四年六月 著者記

第二章 転生と因果律の発見——『日本靈異記』

1

この本は、およそ九世紀のはじめごろに成立したとされる『日本靈異記』の内容をまずはじめにとりあげる。その理由は漢訳仏典や仏教僧の渡来などによって、仏教思想はすでに広くわが国に知られていたにしても、この思想が高度な哲学的思弁としてではなく、民間信仰として、とりわけ本書のテーマにそって、さまざまの〈靈異〉をもたらす不可思議な信仰として、どのように受容され流布していたかを鮮かに示す最古にして最大の書籍だからである。すでに序にも触れたことだが、仏教渡来以前の『古事記』『日本書紀』『風土記』のたぐいにも日本人の幻想的精神活動は記されていて興味をそそられないわけではない。しかし、輪廻転生・因果応報、此生以外に前世や来世があつて因果律で結ばれるといった生命の流転観は仏教をもつてはじめてわが国に導入された思想であり、この思想によ

って日本人の想像力は大きく解放され、あえて言えば変革されたことは事実であろう。ここにまずとりあげる『日本霊異記』にはそのような話が多数収録されているが、たとえ相手が動物であってもその動物のうちにおのれの肉親の転生の姿を見るなどという事態は、仏教渡来以前のわが国の人びとにはなかった考え方であり、また書籍に見出せないところである。私は、一個の動物が人間の化身でありうるとするこのような考え方のうちに、前述のごとき現代人が見失ったきわめて貴重な一種超現実的な幻想の姿を見、仏教という宗教をいちおうはなれて独特な上代人の幻想の力を見たいと思う。

さらにこの本の内実を『日本霊異記』から始めるについては、もうひとつの別の理由がある。のちに見るようにこの書籍は因果応報・輪廻転生を説く百以上の説話から成っているが、僧侶がそうした教義を説くための説話でありながら、説かれる側の民衆の見聞や伝聞によると考えざるを得ないものが逆に、少なからずここには混入し収録されている。今後、本書の記述に当たっては、私はつとめて文字のあいだから歴史のさまざまな時代にわたって民衆の生き方や生きた声を拾いあげていきたいと思う。知識あり学識あり文才ある人びとが記録しているさまざまな説話・物語・戯曲などをつうじて、各時代の民衆がどのような幻想を想像力によって生んでいたかを探ることをもって、この長篇のエッセーの目標としたいと念願しているのである。とはいえ、たとえば『源氏物語』のような宮廷文学の場合には、直接民衆の姿をそこに見ることはできない。しかしそこに登場する人物たちは、やはり仏教から導入された輪廻や応報の時空のなかに生きているのであって、その点に関しては上下に差別はない。その点については第三章にとりあげる『今昔物語』が多くの民間説話によって、いわば裏側か

ら明らかにすることになろう。

2

『日本靈異記』、原名『日本国現報善惡靈異記』は上・中・下三卷より成り、各説話は古いものから順に配列されているが、編集をおわって完全な形となったのは弘仁十四年（八二三）前後とされている。編著者は奈良薬師寺の僧景戒（きやうかい）という人物であった。僧侶とはいえ、いわゆる私度僧として市井に住み、妻子をもち、ために巷間に伝わる伝承を採取してこれを選述することができたのであろうという。諸説話の背景となる時代は奈良京から長岡京へ、平安京へと遷都された時期に当たる。

上巻の序言にあたるところに、「因果の報（むくい）を示すにあらずは、何に由（よ）りてか、悪心を改めて善道を修めむ。（改行）昔漢地にして冥報記（みやうほうき）を造り、大唐国にして般若験記（はんにやげんき）を作りき。何ぞ、唯し他国の伝録をのみ慎みて、自土の奇事を信じ恐（おそ）りざらむや。粵（こく）二起（た）ちて自ら矚（み）るに、忍び寝ムコト得ず」、「聊（いさ）かに側（かた）ニ聞けることを注（しる）し」、「日本国現報善惡靈異記」と名づけて後世に伝えたいと思うとある。すなわち中国で書かれた『冥報記』（唐時代、七世紀中頃）、『金剛般若経集験記』（同、八世紀初）をモデルとして、わが国で起こった靈異の事談を記録するものだというわけだが、右の二書その他の中国仏教説話の翻案も『日本靈異記』には含まれていることが知られている。

ところで早速だが、僧景戒自身が体験した靈異談が下巻の「災と善との表相先づ現れて、而る後に其の災と善との答を被りし縁 第三十八」に記されているので、これをまず聞いてみたい。二つの夢の話である。

その一、延暦六年（七八七）の秋、九月のある日、景戒が自分の罪を悔い、慚愧の念に駆られて次のように嘆くことがあった。

嗚呼恥しきかな、羞シき（恥しと意味同）かな。世に生れて命を生き、身を存ふることに便無し。（中略）俗家に居て、妻子を蓄へ、養ふに物無く、菜食も無く塩も無し。衣も無く薪も無し。毎に万の物無くして、思ひ愁へて、我が心安くあらず。昼も復飢ゑ寒ゆ。夜も復飢ゑ寒ゆ。我、先の世に布施の行を修せずありき。鄙なる（賤しい）かな我が心、微しきかな我が行

仏門の權威によつて公認されない私度僧なるものの惨憺たる生活ぶりを写して余りあるが、その日眠りのうちに景戒はひとつの夢を見た。ひとりの乞食者が彼のもとを訪れて教えをたれ、「上品の善功德を修すれば、一丈七尺の長身を得む。下品の善功德を修すれば、一丈の身を得む」と告げた。見れば相手は既知の紀伊の人、沙弥鏡日であった。景戒は自分が上品の修業はおろか下品の徳をおろそかにしていたのに気づき、わが身が五尺余りなのを悟つて一念發起し、炊ごうとしていた白米わずかばかりを乞食者に施した……。